９月号

昭和58年９月１日
編集／発行
岡崎市教育委員会

校地に隣接した林の中に
学校創設者の顕彰碑が建っている。
この碑の清掃を思い立った日から
児童会のボランティア活動が始まった。

毎月一日の日を清掃奉仕活動に
毎週金曜日をあき缶回収活動にと
児童の視野と、活動の幅が広がる。

通学団集合地、広場、神社、公民館等
自分たちがお世話になっている所を
自分たちで美しくしようと
朝露をついて、快い汗を流す。
そこから、子どもらしい夢と
報恩の心と、実践の力が育つ。

（早朝のボランティア活動―奥殿小）

—教育随想—

回　顧

内田克治

私は戦前戦中戦後、三十八年間、岡崎の小中学校に奉職した。現在の小中学校に兎角の問題が続出するのはなぜだろう。

戦前戦中には、こんな問題は余りなかった。それなら戦後の教育が悪いのか、ここでじっくり考えてみる必要がある。終戦直後であった。ある雑誌に日本の経済は五十年で立ち直るかも知れない。しかし、精神の復興は百年以上かかるだろうと書かれてあった。今日なるほどとうなずかれる。

戦前の教育では、先生は絶対に信用されていた。先生の命令には無条件で従うものとなっていた。また、教師は国是に忠実であった。国家に対する滅私奉公が最高の道徳であり、義務であった。

このことは、日本の最大の美徳であったと思う。しかし、悲しくも、この崇高な日本精神は、当時の軍国主義に利用され、敗戦とともに抹殺され、すっかり忘れ去られた。後に残ったものは、国家的道徳基準を失い、何をどうすればよいのか、教師も生徒も自信をなくして茫然自失、過去を顧みる余裕もなく、将来への希望も方途もなく、大きな空虚が日本全体を包んだ。

さて、そんな時、米国は占領下の日本の教育改革を始めた。六三三四制の枠を決め、憲法を始め教育諸制度を制定して、新しい日本の教育を米国式に実施させた。

最近義務教育の期間が長いとか、高等学校の数が少ないとか、(このことも一考を要する問題ではあるが) 教育の核心に触れる事柄ではない。

戦後の教育は新時代とともにめまぐるしく変遷した。人はいろいろに言うが、最近の情勢から見て、知的面ではともかく、生徒として、少年として、家庭の一人として、人間的に欠陥が目立つ。未完成な児童生徒でも、一応の道徳的判断ができていくはずである。この点あまりにも幼稚である。これはどうしたことだろう。

現在の日本の社会は、物質的進歩では世界の先進国に恥じないだろう。しかし、なんと心の貧しいことだろう。なんと物質万能の社会だろう。経済大国で金持ちの国となった日本人の心には、一にも二にも金金…。物質主義が日本人の心を占領した。金がすべての価値であり権力でもある。心は金に買われた。

日本古来の美しい道徳心は金の下僕になり下がった。敬愛信誠、奉仕等の心をどこかへ見失ったのだ。これでは学校教育が立派にできるわけがない。どんなに教師が頑張っても、親が心配しても、この社会の趨勢に押し流されて、子供は自分の行為の間違いすらよく分からない。

教育の価値は、実利性や実用性を越えた、さらに高い人間性の獲得であらねばならぬ。単なる知識技能の修得ではないはずである。記憶万能、知識一辺倒では不足するものがある。

かつて終戦時において、日本の旧来のものは全部悪いものだとして全部廃棄した。そんな馬鹿なことはないはずだ、今この際われわれの先祖がいかにあったか、百年の昔にさかのぼり、日本教育の在り方を、じっくり考えてみたい。進歩は急いではならぬ。一歩一歩前進しよう。

(元岡崎市教育委員)

褒めること叱ること

元美川中学校長
河口信一郎

昔の生徒は「先生に叱られた」と言った。ところが今の生徒の殆んどは「先生に怒られた」と言っている。テレビ等の子供番組の司会者も「先生に怒られたことがあるか」等と、言葉を吟味せずに使っている。

叱られたと感ずる所には反省もあろう。しかし、怒られたと感じては、反感さえも起きかねない。個人の人権を過当にまで尊重する現代日本は、人を叱ることの難しい時代となった。褒めることもそれ以上難しいかも知れぬ。七つ褒めて三つ叱れとか。私もそうであったが、先生と母親はとかく小言が多く、上手な叱り方と褒め方が下手なようである。

機会を逃さず叱ること褒めること。叱る場合は厳しく後を引かずに。前のことまで持ち出す愚痴は、下手な叱り方の代表。これに反し褒める場合はむしろ効果的であろう。

おだて、お世辞も褒め言葉の方便として、固い先生には研究の必要もあろう。

仏壇づくり

小野盛久氏

伝統工芸師小野盛久さんを仏壇の製造販売元である「ぬし市仏壇店」に訪れる。氏は二千五百万円もするという自作の三方開きの仏壇の前に腰をおろして待っておられた。ことし七十八歳、張りのある声。まず最初に切り出されたことは職人気質についてであった。

「仏壇というのは、年数がたつにつれて良さがわかってくるもんです。売る時にいくら立派なことを言っても、ごまかし半分ではばれてきます。わしは職人上がりだから、偽金を使ったり、塗りの手抜きは絶対できん。自分に見る目があると、そんな物は売れませんわ。どれをとってもわしの信用がついてまわりますからね。」

仏壇づくりは、大きく分けて八つの専門の仕事から成り立つ。それを八職と呼んでいる。木材から仏壇本体を造る木地師、屋根部分を造る宮殿師、合天井を造る天井師、昔は飾り職人ともいった金物師、絵や家紋をかく蒔絵師、絵模様を木に刻む彫刻師、漆塗りをする塗師、金箔を置き並べる箔置師である。小野さんは塗師と箔置師、さらには組み立てについての工芸技術を持っている。

「わしは高等小学校を出ると、すぐにおやじがはじめたこの道に入ったんです。ですから、二代目になりますか。おやじと四人の職人の手つきを見ては、ああするのかこうするのかと覚えていったもんです。十九歳で年季明け、二十五歳で所帯を持ちました。」

愛知県のように三河仏壇と名古屋仏壇の二つの産地があるのは珍しく、製品の優秀さにかけては京都に並ぶものといわれている。

「東京には製造販売の店はないんですよ。よくお前のとこの物なら、見なくても信用できるから送ってくれというお客さんもいます。今は店の車で直接届けていますが、以前は国鉄を利用して出したので、荷づくりが大変でした。」

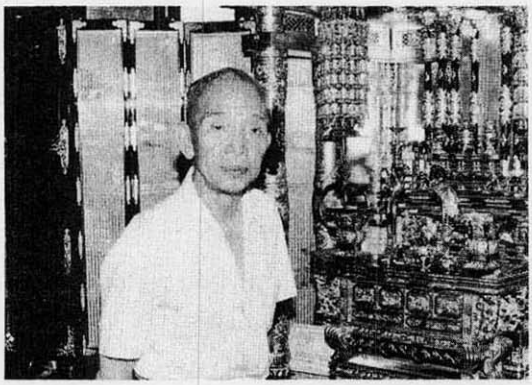
現在、店は長男の隆さんが担当し、工場の方では三男の哲雄さんが、厳格な伝統技術を受け継いでいる。

「わしは重厚な塗りを大切にしているんです。そのためにも漆を塗る前の下地づくりに一番気を遣うんです。良質の天然漆を大量に使うことも大事ですね。ぶきっちょな者はいくらやっても駄目ですわ。それと根性といったところですかね。幸い、筋のいい跡取りができたのが何よりですわ。」

隆さんは父親盛久さんについて、こうしめくくってくださった。

「一言でいえば明治生まれの職人といったところですか。今でも気が入らなかったら外へ出て行けと叱られますよ。これからは業界全体のレベルアップのためにも頑張ってもらわないと。」

（生年月日　明38・2・2
住　所　岡崎市針崎町北門八九
職　業　ぬし市仏壇店（伝統工芸師））



ほめることは伸ばすこと

連尺小　山下八重

しかし、これはあくまで方便、度が重なれば、却ってその先生に対する信頼を失うおそれのあることを忘れてはならない。

「○○君がトイレのスリッパを揃えてくれたから、次の子が履き易いね。」

落ち着きがなく荒っぽくて集団生活に適応できにくい子も、よく見ればそれぞれによい面をもっているものである。『困った子』と思ったら、それだけにその子をつぶさに観察し、そっとほめ言葉を投げかけることが、その子を不適応行為から脱出させる第一歩になる。

誰しも他人から存在価値を認められる事は誇らしいことで、精神的に安定する。まして、自分が信頼している先生からほめられるということはなお嬉しく、『次には○○をしなくちゃあ。』と主体的な態度の芽ばえをうながす基となる。

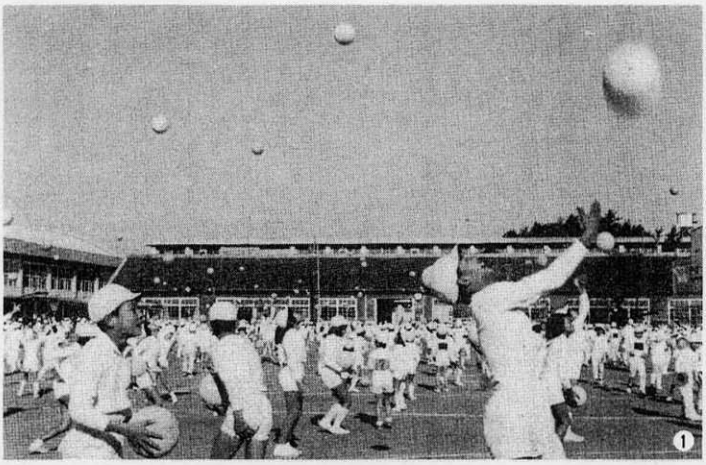
私の学級では帰りの会で『がんばった子をほめてあげましょう。』という運動を一学期間進めて来た。

「○○ちゃんは、今日名札をつけて来たからよくがんばったと思います。」

忘れ物の多いI子は組中からの拍手を受けてにこにこし、その後決して名札を忘れない子になり、集中力さえ向上した。

ほめる行為は、その子の内に有る力を無限に湧き出させる糸口になるものだと私は信じている。

ゆとりの時間



「ゆとりの時間」が実施されて以来、小学校では四年目、中学校では三年目を迎えた。その間、試行・検討を繰り返しながら実践がなされてきた。そして、今一応の成果を見るようになった。そこで、今回は「ゆとりの時間」にスポットを当て、特色ある活動の一端を紹介したい。

一口に「ゆとりの時間」と言っても、活動の内容や時間の設定はたいへん多岐にわたっている。ここに掲げた表は、昨年度、市内の小中学校で実施された活動の内容を分類したものである。

創意工夫された計画のもと、そこで活動する子どもたちが、生き生きとした姿で躍動している。

時間の設定についても、各校の独自性がみられる。特徴としては、毎日授業前（あるいは業間）に十分ないし二十五分程度を設けていること、二時限つづきで設け、学校・学年・学級裁量の時間に充てる学校が多いことなどがあげられる。

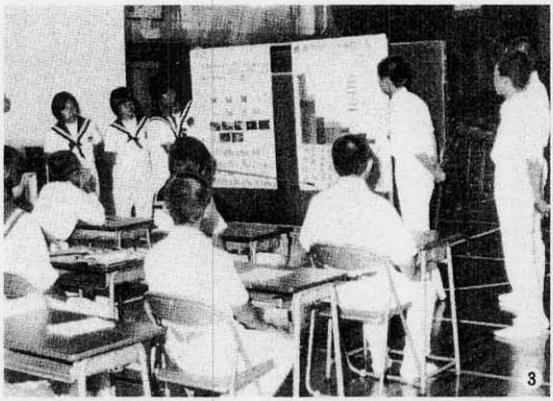
創意工夫は、決して奇をてらうことではない。子どもたちが興味をもって生き生きと活動することにこそ「ゆとりの時間」の本来の意味がある。

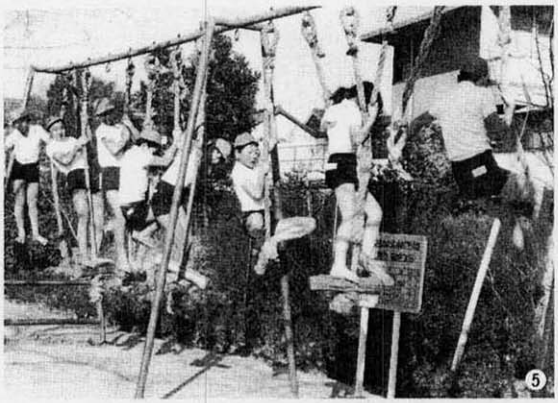
しかし、こうした地道な実践にもかかわらず、「今の子どもたちにゆとりなんてあるのだろうか」という声がないわけではない。いろいろな反省点や問題点を今一度考えてみる必要があるのではなかろうか。

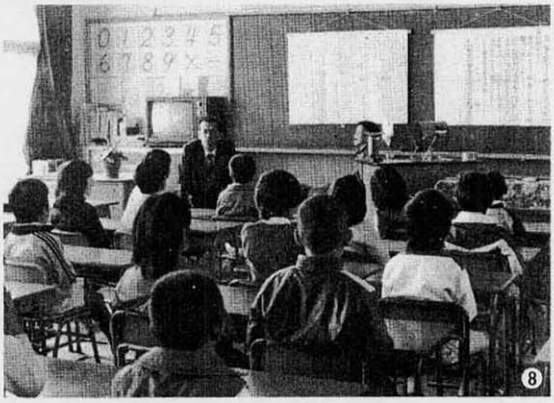
「ゆとりの時間」の活動内容（五十七年度の実践）

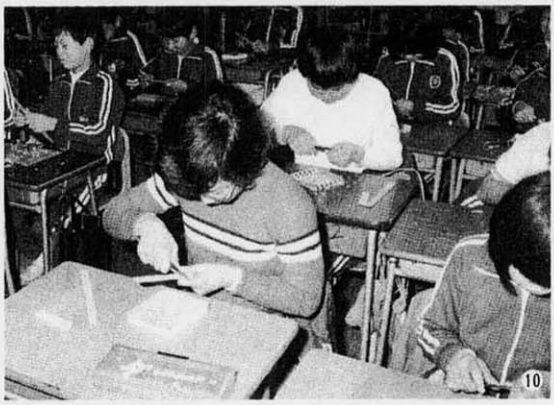
分類	項目
1 集会	仲間づくり集会、児童・生徒集会、なかよし集会、お月見の会、等
2 自然	「野鳥の森」観察学習、親子植樹、学校林活動、等
3 文化	七夕音楽会、朗読会、読書発表会、生活体験発表会、等
4 社会	郷土の歴史探訪、文化財や遺跡の見学、等
5 体育	球技大会、業間かけ足、乾布まさつ、オリエンテーリング、サーキットトレーニング、桑谷山に登る会、室内オリンピック、等
6 保健衛生	保健（歯みがき・目を守る）活動、遠望訓練、等
7 安全	交通安全教室、避難訓練、等
8 勤労奉仕	農園活動、清掃奉仕活動、ササユリ保護活動、一人一鉢栽培、等
9 創作	手仕事、紙飛行機大会、クロッキー、竹馬づくり、こまづくり、収穫祭、親子新聞づくり、等
10 レクリエーション	百人一首大会、カルタ大会、フォークダンスの会、のどじまん大会、等
11 教育相談	助け合い学習、教科補充学習、学習相談、等
12 家庭生活	生活相談、等
13 自由研究	自ら学ぶ活動、等
14 その他	数字・ひらがな・漢字の基本学習、手紙を書く会、三分間スピーチ、おはよう運動、テレビタイム、交流学習、ことばの練習、等

昭和五十七年度「ゆとりの活用」（岡崎市教育委員会発行）より抜粋









① 全校児童によるボール運動（岩津小）
② 学区の旧跡案内板づくり（香山中）
③ NHKテレビ「みどりの地球」を視聴しての調査と発表（美川中）
④ 業前のおはよう運動（岡崎小）
⑤ 遊具を使った体力づくり（連尺小）
⑥ 養護学校との交流学習（本宿小）
⑦ シイタケ原木を切り出す学校林活動（常南小）
⑧ 発声発音とことばの練習（矢北小）
⑨ 二十分間の自由読書（根石小）
⑩ 小刀、はさみを使っての手仕事（羽根小）

教育日々

準備教師

南中　金沢　強

「そうじゃあない。こうだ。」と、手本を示し、「言ったとおりにやること。」と、大声を出す。

「何回同じ失敗をしとるんだ。」

道具を使って行う木材加工に、生徒の顔は輝き、真剣そのもの、私語もない。それなのに、正しい加工技能でない自己流をしがちである。その結果、どうしようもなくなった材料を手に、神妙な顔でくる生徒に、わたしは、新しい材料を渡したり修正したりの失敗請負教師的存在だった。

だが、今は、「生徒に失敗はつきものだ」と考えるようになっている。失敗をバネにして、生徒の問題意識を芽ばえさせ、学習上の問題点・矛盾点を生徒自らに追究させていく中で、基礎的技能を定着させるのである。

小作品の「はがきいれの製作」①での失敗の中から、

「どうして切り口が斜めになるか。」

「かんな身はどのくらい出したらいいか。」

「すぐ板が割れてしまうが。」

等々の疑問点から追究課題を設定する。

これを個人・グループで追究させるために、わたしは、毎時間の実態把握・教材研究・材料準備、追究方法の検討などに追われる準備教師的存在となる。

3段階の授業過程

①オリエンテーションの学習
↓
②個人・共同追究
↓
③検証

この準備は、生徒の創造性を発揮させ、個性を生かし、楽しい授業にするためには不可欠である。

検証で発表する生徒の顔は自信にあふれている。

- 木取り寸法と切りしろ、削りしろ
- 差し金のはたらきと使い方
- 両刃のこぎりの使い方
- 材料の硬さと角度
- のこぎりのあさり
- かんなの使い方と加工手順
- かんな身の出し方と逆目
- 平削り、小口削り、小端削り
- 釘の長さと板の厚さ
- 接合方法のいろいろと強さ

生と死

藤川小　竹本　弘美

夏休み中の学年出校の日。子どもたちの日焼けした顔、にぎやかな笑い声。

久しぶりに学校が生き返ったことを感じながら、職員室に一歩を踏み入れた。

その時、私は、回りの明るい雰囲気からポツリと取り残されてしまったS男の姿に気づいた。

「おはよう。」

「……。」

「おはよう。」

「……。」

返事がないばかりか、声をかけるほどに、彼はうつむき小さくなってしまう。やがて、目にうっすらと涙をためはじめた。

久しぶりに顔を合わせた出校日。すべての子どもの潑剌とした笑顔を期待していた私にとって、この涙はショックだった。

「どうした？」

「……。」

「けんかでもしたの？」

「……。」

「叱られた？」

「……。」

「何か、飼ってたものが死んだの？」

黙って頷いた途端、S男の目に一気に涙があふれた。

「何が、死んじゃったの？」

「いぬ。」

「病気で？」

「そう、前から悪かったけど、きのう急にまた悪くなって…。」

「死ぬところ、見れなかった。ぼく、きのうまで泊まりに行ってたから。帰ってきたら、死んだよって、お母さんが教えてくれた……。」

（そうだった。昨日まで彼は、二泊三日のトレセンに参加していたのだった。）

出かける前から、具合が悪かったと言う。三日の間、いてもたってもいられなかったであろう心情を思うと、胸が痛くなる。

幼い日の記憶が甦る。子どもの日にもらった金魚が、氷の張る池の中にぽっかりと浮いてしまった日。家族同様に可愛がった犬が手当てのかいなく死んでしまった日。ごはんも食べずに泣きじゃくっていた。生きているものの死に敏感に反応し、心から泣いた日が、確かに私にもあった。

道端で車にはねられた犬を見た時、「哀れさ」よりも先に、「気味悪さ」を感じるようになってしまったのは、いつの頃からだろう。

生きているものの、「生」と「死」に対する純粋な目を取り戻したい。そして、そこから生まれる悲しみに子どもがぶつかった時、受けとめ、慰めてやれるだけの抱擁力を身につけたいと思う。

校内放送設備の充実

双方向システム三か年計画始まる

今年度から三か年計画で、校内映像放送の双方向システムが導入されることになった。

従来は映像放送が可能な学校でも、放送室からでないと全校放送はできなかった。それが、双方向システムが導入されると、カメラとVTR、それに変調器を持って行けば、どこの教室からでも全校へ放送できることになる。

今までは、授業の様子を児童・生徒が参観することは不可能に近かった。それを、このシステムを利用することにより、同じ学年の子どもたちに、生で視聴させることができ、新しい授業研究の手法が可能となる。

また、体育館から映像を送り出せば、教室で視聴でき、入学式や卒業式なども、すべての子どもたちが参加できるようにもなる。そのほか、保健室や図書館の利用指導、雨天時の全校集会など、ビデオに集録することなく、中継も可能である。

このように幅広い活用が約束される双方向システムの導入は、画期的なことといえよう。

今年度は、小学校十三校、中学校五校に設置される予定である。該当校はすでに工事が始まっており、二学期中には使用可能となる。なお、テレビカメラと携帯用VTRは、やや遅れるが、今年度中には該当校すべてにシステムの一環として設置される予定である。

なお、昭和五十六年度から三か年計画で設置して来た放送プログラム装置と中学校のLL及びアナライザーは、今年が最終年度にあたり、新香山中を除き間もなく工事は完了する。

こうした一連の機器を十分活用し、教育効果を一層高めていただきたい。

【寄贈刊行物・資料等】

◆岡崎の視聴覚教育 第14号 視聴覚ライブラリー B5 一〇六ページ

◆美川の教育 美川中学校 B5 七三ページ

◆甲山の教育 甲山中学校 B5 一四四ページ

◆感動ある授業の創造 緑丘小 B5 二九五ページ、孔版印刷

◆おかざきの英語 No.11 英語部 B5 一四八ページ、孔版印刷

◆校長会誌 No.8 小中学校校長会 B5 二七ページ

◆算数・数学研究集録 算数数学部 B5 孔版印刷

■第十一回生徒市議会

八月九日、岡崎市議会本会議場で、生徒会連絡協議会が主催する生徒市議会が開かれた。

今年は、理事者側も中学生が担当し、市長や教育長になりきっての答弁が行われた。

東公園の将来構想、通学路の安全対策、矢作地区の総合開発など活発な質疑・応答がなされ、充実した学習が展開された。

■愛知県健康優良校に愛宕小

昭和58年度愛知県健康優良校に中規模校の部で愛宕小学校が特別優秀(第一位)に選ばれた。

第36回岡崎市中学校市長杯総合体育大会兼西三河中学校選手権大会岡崎・額田支所予選会

昭和58年7月14～21日

種目	性	優勝	2位	3位
軟式野球	男	城北	矢作	東海・葵
ソフトボール	女	幸田	葵	城北
ハンドボール	男	六ッ美	城北	美川・葵
	女	六ッ美	美川	葵・岩津
軟式庭球	男	東海	幸田	岩津・甲山
	女	幸田	額田	城北・矢作
卓球	男	幸田	河合	六ッ美・幸田南部
	女	竜海	河合	東海・幸田
バレーボール	男	幸田	竜海	六ッ美・矢作
	女	竜海	福岡	南・矢作北
バスケットボール	男	城北	葵	矢作北・幸田
	女	竜海	矢作北	葵・幸田
サッカー	男	南	福岡	岩津・附属
剣道	男	福岡	幸田	矢作・常磐
	女	矢作	六ッ美	矢作北・福岡
柔道	男	竜海	美川	
体操競技	男	六ッ美	竜海	甲山
	女	美川	南	竜海
陸上競技	男	六ッ美	福岡	岩津
	女	福岡	甲山	岩津
水泳競技	男	矢作北	甲山	竜海
	女	矢作	甲山	竜海
弓道	男	幸田A	幸田B	
	女	額田A	幸田南部	

市長杯総合成績

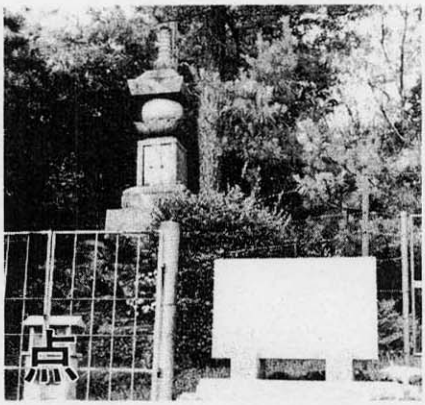
性別	優勝	準優勝	3位	4位	5位	6位
男子総合	矢作北	葵	矢作	六ッ美	城北	竜海
女子総合	竜海	矢作	矢作北	六ッ美	南	美川
男女総合	矢作北	矢作	竜海	六ッ美	葵	南

昭和58年度岡崎市小学校球技大会並びに水泳競技大会成績

昭和58年7月21～26・28日

種目	性	優勝	2位	3位
ソフトボール	男	細川	山中	大樹寺・連尺
	女	広幡	細川	矢南・連尺
バレーボール	男	山中	井田	大樹寺・六南
	女	竜美丘	六中	奥殿・矢南
バスケットボール	男	井田	大門	竜美丘・連尺
	女	大樹寺	愛宕	竜美丘・城南
サッカー	男	常磐	大樹寺	岡崎・細川
水泳競技	男	井田	大樹寺	細川
	女	矢南	大樹寺	根石

金生坊



所在地―岡崎市洞町

東公園の東の丘の上にそびえている国治天文台、ここから眺めれば市内全域が一望の下に見下ろせる。

さて、権現橋を渡り、うっそうと茂る緑陰をぬけて歩くことしばし、男の子橋からの遊歩道と合流する付近に、山仙石材という採石場がある。ここに「金生坊」と記した石の立派な門柱が一対立っているが、気に止めた人はあるだろうか。

さて、この「金生坊」は何だろうかと、門柱をぬけ、道を踏み分けあえぎあえぎ登ると、何と、国治天文台の敷地に出てしまい、僧坊などはどこにも見当らない。そのかわり、市内が一望できる一角に、高さ四メートルほどの立派な五輪塔が目に飛び込んで来る。霊域の前には「雷清金趙坊霊人頌徳碑」という石碑が建っている。

碑文によると、この五輪塔は明治の初め、日本国中の霊山で仙人修行をした板屋町出身の山本伊三郎という山伏の墓塔である。昭和五年、人々の苦悩を我が霊力で救うため、この高台に塔を建立せよと遺言して、永遠のねむりについたという。

やがて開戦、そして、敗戦。焼け野原の町並を見下ろして、金生坊さんはどんな思いであっただろうか。

●カット　福岡小　伊藤厚子

オアシス

「おとうさん、おはようございます。」「おかあさん、おはようございます。」と、我が家の中学生は挨拶する。

このように挨拶ができるようになったのは、小学校一・二年の担任の先生の指導のお陰であり、今も感謝している。

さあ、二学期のスタート。オアシス運動を展開しようと思う。

自然と語り合った夏。クワガタにカブトムシ採り。子どもたちの目が輝く。未知なるものを追い求める。鋭いまなざしで自然を見つめる。

新学期のスタート。まっ黒な顔をした子どもたちが元気に登校した。

今学期もまた、私たちの授業で子どもの目を輝かせてやりたい。

明日の教育を考えた学校独自のゆとりの時間は、地域に適したそれぞれの工夫がうかがわれる。

目先のことにとらわれがちな生活の中に一種の空間を創り、遊びの時間を生み出す心の余裕を、子どもたちは見つけてくれるであろうと、教師たちの切なる願いがこめられている。

「すみません。」という言葉には、なぜか美しい響きがある。それは、話す人のつつましい心がうかがわれるからだろうか。飾られた言葉ではない。人間の素直な心の表出である。

日本人の心の奥底に脈々と流れ続けている日本語の意味深さ、美しさを大切にしていきたいと思う。

この本を

＊1990年の日本	山本　七平
福武書店	980円
＊近世史のなかの女たち	水江　漣子
日本放送出版協会	750円
＊実のある話	外山滋比古
旺文社文庫	320円
＊続・教育は死なず	若林　繁太
労働旬報社	1,200円
＊教育のへき地	溝口　謙三
日本放送出版協会	600円
＊電卓と新幹線	刀祢館正久
新潮社	980円
＊家　族	山口　瞳
文芸春秋	1,500円
＊新・昆虫記	岩田久二雄
朝日新聞社	1,900円
＊若い葦	三好　京三
学習研究社	1,100円
＊女の暮らし再発見	鈴木　健二
ＰＨＰ研究所	880円